

日本イギリス哲学会関東部会 第 87 回研究例会

日時 2011 年 7 月 16 日 (土) 14:00～17:15

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 北館 1 階 会議室 2

プログラム

14:00～15:30

知識と知恵

ーキングとバークリー

野村 智清 (東京大学大学院)

15:45～17:15

スミス同感論の構造と言語論、神学の関係めぐって

大島 幸治 (実践女子短期大学非常勤講師)

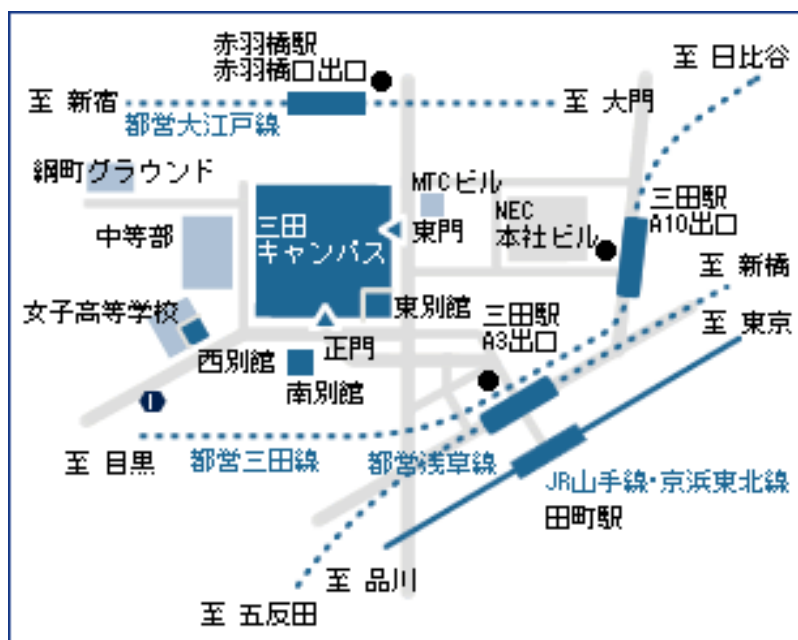
関東部会担当

坂本達哉 (saka[at]econ.keio.ac.jp)

柘植尚則 (tsuge[at]flet.keio.ac.jp)

※[at]を@に置き換え下さい。

【会場案内】

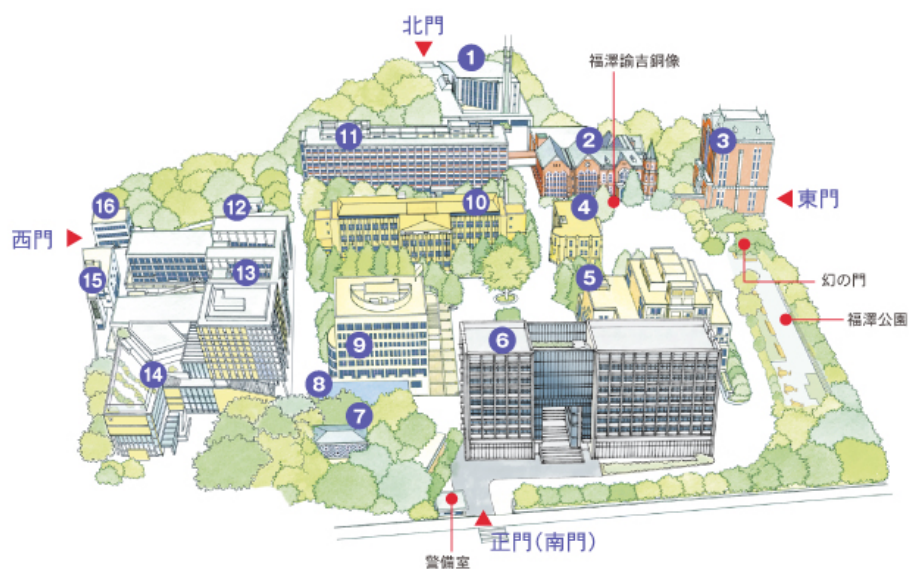


108-8345 東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車、徒歩 8 分

都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅下車、徒歩 7 分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋下車、徒歩 8 分



北館は①の建物です

日本イギリス哲学会関東部会第 87 回例会（2011 年 7 月 16 日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

知識と知恵

—キングとバークリー—

野村 智清

バークリーは知識をどのように捉えていたのか。この問いは、僅かだが意義深い例外を除いて、多くのバークリー哲学研究ではグローバルな影響関係を背景に特定の著作をその主題として考察されてきた。確かにデカルト、マルブランシュあるいはロックやヒュームといったフランス語圏あるいは英語圏の哲学者たちとバークリーのグローバルな影響関係を背景に、『哲学的評註』、『視覚新論』、『人知原理論』、『三対話』そして『アルシフロン』といった著作を主題としてバークリー哲学における知識概念を明確化することは多くの研究成果を産み出してきたと言える。

しかし、これまでの研究ではあまり扱われなかった背景や著作もバークリーの知識の捉え方と密接な関係を持つ。著作や書簡で仄めかされているように、バークリーはトーランド、モリニュー、キングそしてブラウンといったアイルランドの哲学者たちとローカルな影響関係を持っていたことはまず間違いない。また例えば『人知原理論』などと同じ時期に出版され実施された『受動的服従 (*Passive Obedience*)』に代表されるような説教での道徳や神学についての考察は、バークリーが知識を多くの研究で考えられているよりも広い射程を持つ概念として捉えていたことを浮き彫りにする。

これらのことから本報告ではバークリーの知識の捉え方をキングの影響を背景に考察していく。多くのアイルランドの哲学者たちの影響が仄めかされるのみに留まっている中で、キングの神の予知と人間の自由を巡る説教に対して、バークリーは書簡の中で、その知識や知恵の捉え方への明確な反対を表明している。この反対を踏まえてバークリーが知識や知恵といった概念をどのように鍛え上げていったのかを考察する。

スミス同感論の構造と言語論、神学の関係をめぐって

大島 幸治

アダム・スミス *TMS* 初版の同感論をめぐって、近年、「エディンバラ公開講義」の「日常のビジネスの言語」、平明率直、単純な文体と性格、「説得」を中心とした法廷弁論との連続性に目を向ける議論が増えている。「公開講義」を継承しているとされる「修辞学・文学講義」(*LRBL*)や言語への論究は、「日常生活の事実」として密なるコミュニケーションを前提した人間像や作用因としての人間行動の能動性に目を向けたスミスの視点を示していて、

TMS「同感」論の構造と密接な関係にあると考える。Griswold, Darwall 等は、スミスが描く諸個人の感情交通の構造に演劇的な要素や人称の問題を読み取る解釈を提出している。この解釈は、*LRBL* に示される、ある種の「同感」獲得願望を反映した「説得」を目標とするコミュニケーション論に関連を持つ。D.D.Raphael は *TMS* 初版の actor は「演者」に結びつかないと批判したが、*LRBL* の「解説」の記述は説得する語り口にも言及しており、それはスミス独自の「人称」観を反映していると考えられる。

またスミスの「人一人」の感情交通の構造、また散見される神学への言及は、同時代の神学問題と無関係ではない。当時、スコットランドの改革正統主義神学は、外にイエズス会、アルミニウス主義という、「人間本性を王位につけ、功績を激賞し、キリストの恵みを卑下する」点で共通する両極の議論と対決していた。またキリストの贖罪を神の無償な赦し概念に反するとするソツツィーニ主義とも対抗する状況にあり、自然主義的形而上学や理神論が自然の出来事の因果的必然性、普遍的必然性を強調して人間の自由意志を幻想だとするのにも対抗して、神の主権的恵みを強調しつつ現実における人間の自由意志と能動性を保護していた。他方、内には、ハイパーカルヴァン主義と穏健主義による教会統治の主導権争いがあった。スミスが残した神学に関する記述は、穏健な正統主義として解釈でき、それが「同感」の構造とも関係している点を検証しようと試みる。